

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02338

研究課題名（和文）日本の着物における新解釈の可能性に関する研究

研究課題名（英文）Study on the possibility of new interpretation in Japanese Kimono

研究代表者

田中 淑江（TANAKA, Yoshie）

共立女子大学・家政学部・教授

研究者番号：70636456

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：近年、着物の装いは伝統的な概念にとらわれず、自由な発想で装う傾向が見られる。本研究では、この新しい概念を明らかにし、着物の継承の可能性を考察した。研究結果より、この概念とは、伝統的な着物と洋服のアイテムを融合させ、個性を表現し、日常の衣服の一つと位置付けることである。研究対象者はこの装いを柔軟に受容する傾向を示し、コーディネートが多様性、苦しい着付けの解消など新たな着物の一面として認識した。今後の課題はこの装いも着物の装いの一つとして認識されることと、着物市場価格の低価格化などが挙げられるが、本研究では自由な発想の装いに着物着用者の裾野を広げる可能性を見出すことが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

着物の着用者が減少する現在、伝統的な着物と洋服のアイテムを融合させた自由な発想の装いは、若い世代に個性を表現する手段の一つとして受容され、着物の着付けの難しさや動きにくさなどの問題点を解消する長所とも認識されていることが明らかとなった。しかし、従来の着物研究では伝統的装い以外を取り上げることはほとんどないのが現状である。今後は伝統的装いを基本としながらも、着物の装いの多様性について幅広くとらえる必要がある。またこの装いを学ぶ環境や世間一般に寛容に認められる環境を整えることが、新たな着物の継承の活路となると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research focused on the new style of kimono in which the wearers expressed their individual preferences regardless of traditional codes and discussed the succession of kimono culture. The wearers recently tended to introduce some items of Western clothes such as a blouse, skirt, or belt to wear with the kimono, regarding the kimono not as formal wear but as a type of casual clothes. Through these flexible ways of kimono wearing, they created a variety of unique outfits, avoiding the tight fit of the kimono. The research revealed that this trend suggested the potentiality of popularizing kimono wearing and that social acceptance of the new style and lowering the market price of the kimono were essential to achieve it.

研究分野：家政学

キーワード：着物 和服 kimono 和装教育 着物のアレンジコーディネート 着物の伝統的装い 若者の着物への価値観の変化 着物の現代的装い

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年着物を取り巻く環境が変化している。従来、冠婚葬祭、通過儀礼などフォーマルな場での衣服というイメージの着物であるが、呉服業界、消費者が普段着の着物へと興味の対象が変化してきている。例えば呉服業界はフォーマル路線からカジュアルやアウトドア路線を展開する企業が存在する¹⁾。また観光地で展開される着物レンタルは若者に支持を得ている。しかし、着物に関する教育及び研究は伝統を守ることを重視する傾向であり、近年の着物市場や消費者のニーズには合っていない。なぜなら、今までの着物研究や和装教育に携わる研究者は伝統的側面に注目し言及してきたからである。しかし、本研究では和装教育の研究者だけでなく、ファッションデザイナーの分担者とともに着物を考えることで、新たな視点として日常に楽しむファッションの感覚を和装教育に取り込むことを試みた。したがって、我々の試みは従来の概念とは異なり、現代の新しい着物の解釈を明らかにすると共に、今後の着物の着用拡大に寄与できると考える。

2. 研究の目的

洋服が日常に着用されるようになった現在、多くの日本人にとって着物は着るための衣服という概念よりも、格式高い、日本の伝統文化の美意識を継承する特別な衣装として考えられている。本研究では、着物をこのような特別な位置づけの衣服ではなく、近年注目され始めているファッションとしての着物の存在に注目し、この新しい着物の概念を明らかにすることを目的とする。新しい概念の着物は若い消費者層に支持されている。このことは、共同研究者と継続して取り組んできた被服教育、着物教育の現場でも明らかである²⁾。したがってこの層を確実に、着物着用消費者として受け止めることで、着物市場の拡大へとつながると考える。長年継承されてきた着物の伝統と、ファッションの両側面から着物をとらえ、着装することが可能な環境を創り上げたいと考える。

3. 研究の方法

(1) アンケート調査

調査対象：都内女子大学家政学部被服学科所属 18 から 22 歳 1 回目 2019 年度 235 名 2 回目 2020 年度 206 名

アンケート内容：着物に対するイメージや興味、着用経験、購買意識、着物の着付け、伝統的な装い(和装小物のみでコーディネート)と自由な発想の装い(洋服のコーディネートに使用しているアイテム、例えばブラウスなどのインナー類や、ベルト、カバンなど)についてなど

アンケートの評価方法：4 件法、択一式、複数回答、自由記述

(2) 着物の自由な発想の装いに関するインタビュー調査

調査対象：同大学被服学科 20~22 歳 普段から自由な発想で着物を着装する 5 名

調査内容：着物に興味を持つきっかけ 自由な発想の装いに興味を持ったきっかけ 自由な発想の装いの発想方法 自由な発想の装いを着用していく場所 自由な発想の魅力について

(3) 着物着装実験

調査対象：同女子大学被服学科専門教育科目「伝統和服制作実習 (和裁)」履修者 44 名

調査内容：授業で制作した浴衣を用いて、最初に伝統的装いの着付けを行い、次に自由な発想の装いを各自が検討、実践する。

調査方法：伝統的装いと自由な発想の装いの着装方法について写真を掲載し考察や感想を記載した実践レポートを分析

(4) kimono をファッションとして捉えた調査

調査対象：ファッションに関する基礎知識を学んでいる同女子大被服学科所属 18 から 22 歳、100 名

調査内容および分析方法：市場で提案されている kimono スタイル画像を用いて、ファッションイメージ用語を用いた評価を行う。次に、日常のファッション志向を記述式アンケートで回答を求める。最後に一番着装したい kimono スタイルを自由記述で回答を得て、KH Coder を用いて分析する。

4. 研究成果

(1) 1 回目のアンケート結果では、女子大生の着物に対する意識は全般的に、好意的傾向を示した。「着物を着ない理由」には着物を着ていく場所がないが上位で、「着物のコーディネートが自由なら着てみたいか」の問いに 76%の学生がそう思うと回答した。実際に着物を着る場合、着ていく場所や、コーディネートが懸念材料であるようだ。一方、学生の消費者の立場としては「お小遣いに占める被服費」は 5,000 円以上~10,000 円未満、10,000 円以上~20,000 円未満、20,000 円以上~30,000 円未満の順であることが示された。学生の被服費と着物の値段の乖離は問題である。

2回目のアンケートは質問内容をさらに掘り下げ実施した。女子大生に浴衣と着物に区別して着用意識や行動を質問したところ、浴衣は、ほぼ100%が着用したことがあり、着用の場合はイベントが主流である。同様の質問で着物は90%の着用率であり、着用の場合は儀式が主流であった。次に「今後着用してみたいと思うか」の問いには、それぞれ99%の学生が「着てみたい」と回答した。着て行く場所や機会では浴衣は「観光地やイベントのお出かけ」が多く、着物の場合は「観光地やイベントのお出かけ」45%「人生の通過儀礼」40%の順であった。女子大生は着物を浴衣と同じように普段にも着用したい傾向が示された。

次に1回目のアンケートの問い「着物のコーディネートを自由なら着てみたいか」をさらに掘り下げた。自由な発想の装いに対する考えを明らかにするために(表1)を提示し、自由記述で回答を求めた。その結果9割は肯定的に受容するという回答が得られた。またこの自由な発想の装いに対する受容内容を具体化する質問では、全ての自由な発想の装いに対して、好意的傾向が示された。しかし着物を着崩し過ぎると感じる自由な発想の装いに対しては、自身は着ないと考えることが分かった。着物のイメージである上品、美しいなどを活かす範囲での自由な発想の装いが好まれることが明らかとなった。



さらに普段着として着物を実際に装うことを想定し、伝統的な装いと自由な発想の装いについてどう思い、どうしたいかを質問したところ、「伝統的な装いも自由な発想の装いも両方とも着こなしたい」が主流であったが、2割程度の学生は「伝統的な装いをしたい」「自由な発想の装いをしたい」と回答した。また、実際に装った経験に対する質問では伝統的な装いが主流で、ほとんどの学生は自由な発想の装いは経験がないことが示された。この際の、コーディネートの傾向としては、着物の着用方法は伝統的着方に則り、崩して着ることはなく、洋服はさりげなく着物の内側に取り入れることを好み、また小物も特別なアイテムではなく、日常の洋服に用いているものを、自由な発想の装いにポイントとして用いていた。草履は着物の重厚感や特別感が出てしまうので履かず、日常の履物類を取り入れていた。これにより、動きやすく軽快で気軽な装いとなっていた。

以上のことから女子大生は着物を装うことに対して好意的であり、今後着てみたい衣服ではあるが、着こなしの上でコーディネートに不自由を感じている。自由な発想の装いに対しては受容する傾向を示したが、実際着装するには至らないことが示された。装う際は、伝統的着物の美しさを尊重し、大幅な着崩しは好まず、日常洋服に用いる小物をさりげなく用いることを望んでいる。今後、伝統的な装いに加え、自由な発想の装いに対する可能性を見出した。また着物は、自分の被服費で買うことのできない特別な衣服であることが明らかとなった。

(2)5つの質問についてインタビューを行った。着物に興味を持つきっかけは、幼いころの経験や身近な家族が着物に関わっていることが関係している。自由な発想の装いに興味を持ったきっかけはSNSで発信されている情報からであった。自由な発想の装いの発想方法は、洋服をコーディネートする感覚である。自由な発想の装いを着用していく場所は特定の場所に限らず、何処へでも着装する。しかし、着装するのは一人、または同じ装いをする仲間とだけであり、着物を着ない友人との外出には、目立つので相手に遠慮して着用しない傾向が示された。自由な発想の魅力については、自らがかわいくお洒落であると思って着装しているという結果であった。

(3)女子大生が伝統的装いと、自由な発想の装いの着装を実践し、レポートに掲載された実践の着装写真や、記述の傾向を分析した。

結果は、女子大生は自由な発想の装いには興味があるが、実際に自身が装う場合は、伝統的装いを基本とし、日常的に身に着けている小物をアクセントとして取り入れることが示された(図1)。

感想からは、伝統的な装いは、着付けやコーディネートの細やかなルールが嫌煙される要因の1つであった。しかし、伝統的な装いは着物着装の基本であり、マイナス面も含めて着物を理解することで、自由な発想の装いに発展するということが示唆された。一方自由な発想の装いは、コーディネートの多様性に気が付き、小物の取り合わせや、色使い、着物を着装する際の着丈を工夫することで、独自の装い出来ることを理解したようである。また、日常に身に着けている小物を用いてコーディネートすることは、着物が身近になるきっかけとなっていた。さらに着物を着用した時の動きにくさの改善や堅苦しい着付けからの解放が期待でき、着物が多くの人にとって気軽に着用できる衣服となる可能性を示唆した。着物の着装を実践することで、自由な発想の装いの長所である、コーディネートの多様性、堅苦しい着付けの解消など新たな着物の一面を



図1 学生が実践した自由な発想の装い

図1 学生が実践した自由な発想の装い

認識することとなった。以上のことから、着物を伝統的装いだけでなく、自由な発想の装いを取り入れることは、着物の普及に寄与するとともに着物を次世代に継承するために必要であると考察できる。

(4) 女子大生に kimono スタイル画像を用いて、ファッションイメージ用語を使用した評価を行った。まず基本として女子大生が着物に日本らしさをイメージする着物のコーディネートに「日本らしい」「ベーシック」のファッション用語で評価を行った。次に、kimono スタイルの嗜好をスタイル画から選択した結果を表 2 に示した。女子大生が「着装したい着物」スタイルは、「日本らしい」「ベーシック」の分類とは異なる傾向であることが明らかとなった。

「着装したい」と感じた理由を共起ネットワーク図に示す(図 2)。その結果、「色 - 柄 - 好き」が共起関係の強い語として抽出された。その他に、「着こなし 感じる」「派手 着る」の共起関係が見られる。女子大生は色と柄を好み、スタイリングを起点に、着装したい kimono スタイルを選んでいると考えられる。

次に、アンケートより女子大生の日常のファッション志向を「レトロガーリー」「ガーリーカジュアル」「ストリートカジュアル」「シンプルカジュアル」「モード」に類型化した。それぞれのファッション嗜好と着装したい kimono スタイルの分析は表 3 に示した。その結果、女子大生の着装したい kimono スタイルは、日常のファッションテイストと類似している、または異なるスタイルを好む、2つの傾向が見られる。異なるスタイルは、伝統的な着装とファッションテイストが違う着装である。先行研究で実施したヒアリング結果などから「着物は着物らしい着装をしたい」「着物だから日ごろと異なる着装をしたい」などの意識があるためと考えられる³⁾。

これらの着装したい kimono スタイルの分析結果より、以下 5 点を導きだした。選択基準は色と柄 柄はモダン柄と伝統柄を好む傾向にある 大手和装企業が提案している 2 つのブランドはモダン柄の提案が見られ、若い女性の志向と合致している 着こなし、コーディネートのスタイリングが重要 日頃のファッションテイストと合致または異なる kimono スタイルを志向している。

表 2 着装したいスタイルの結果

分類番号	A	G	K	C	I	F
スタイル						
人数	22	17	18	9	8	7
割合	22%	17%	18%	9%	8%	7%
「日本らしい」「ベーシック」	(4)	(2)	(1)	(4)	(2)	(3)
分類番号	H	E	D	B	J	J
スタイル						
人数	6	6	4	3	3	0
割合	6%	6%	4%	3%	3%	0%
「日本らしい」「ベーシック」	(3)	(4)	(2)	(3)	(1)	(2)

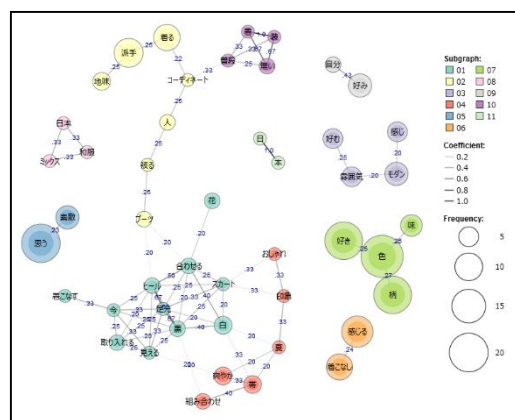


図 2 着装したいと感じた理由の共起ネットワーク

表 3 ファッションクラスター別の着装したいスタイル分析

ファッション志向 スタイル番号	レトロガーリー		ガーリーカジュアル		ストリートカジュアル		シンプルカジュアル		モード	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
A	5	31%	4	29%	4	17%	4	13%	3	75%
B	0	0%	0	0%	2	9%	1	3%	0	0%
C	2	13%	0	0%	1	4%	4	13%	0	0%
D	0	0%	1	7%	1	4%	1	3%	0	0%
E	0	0%	0	0%	2	9%	1	3%	1	25%
F	2	13%	0	0%	2	9%	3	10%	0	0%
G	4	25%	1	7%	4	17%	6	20%	0	0%
H	1	6%	2	14%	1	4%	1	3%	0	0%
I	0	0%	1	7%	0	0%	1	3%	0	0%
J	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
K	1	6%	4	29%	5	22%	5	17%	0	0%
L	1	6%	1	7%	1	4%	3	10%	0	0%
計	16	100%	14	100%	23	100%	30	100%	4	100%

(5) まとめ

以上のことから、新しい概念とは、伝統的な着物と洋服のアイテムを融合させ、日常の衣服の一つと位置付けることである。研究対象者はこの装いを柔軟に受容する傾向を示し、着物の装いの長所と認識した。しかし、この装いを積極的に取り入れる行動には至っていないことが示された。この背景にはコーディネートの仕方が分からない、人目が気になる、伝統的な装いの方が身近であり、継承したいなどの考えが推察される。また学生が抱く着物の概念と、日常のファッションテイストとの関連が明らかになると、若い層が好むファッション的着物の具体的なスタイリングを提案できるようになる。着物の伝統的側面を理解した上で、さらにファッション的視点でとらえることで、新しい着物の側面を発見できる。また着物を両側面からとらえることで、着物着装の選択肢が広がり、着物普及への新たな活路が見いだされるのではないかと考える。

今後の課題としては、伝統的な装いを学び、さらに自由な発想の装いを知る、または実践する

学びの場の検討や、またこの装いを認める環境作りや着物市場価格などが挙げられる。本研究では自由な発想の装いに着物の継承と発展、着用者の裾野を広げる可能性を見出すことが出来た。

<注>

1)きものの「やまと」は従来のフォーマルに偏った市場に10年ごとに新たな戦略で着物の市場を開拓してきた。1990年にきものの「ファッション化」をめざし、2000年「カジュアル化」、2010年「アパレル化」に取り組んでいる。さらに2018年にはアウトドアメーカー「スノーピークス」とのコラボレーションで「アウトドアシーンで気軽に着られるKIMONO」を展開している。矢島敏孝「着物の森」織研新聞社、2015

https://store.kimono-yamato.com/Page/ytg_outdoor-kimono.aspx 最終閲覧日 20220614

2)1990年以前の卒業式の袴姿は、色無地に紺の袴の伝統的な装いであった。近年はレンタル業者の進出や女子大学生をとりまくファッションの環境の変化、学生の和服に関する知識の低下などにより多様な着物を気軽に選べるようになった。パステルカラーや派手目の小紋やアンティーク着物、振袖などの個性を表現する着物と袴を用いた卒業式のスタイルとなった。

田中淑江,長谷川紗織,宮武恵子「現代に見る女子大生の卒業式の袴姿-伝統的着装の変化について-」服飾文化学会誌,

VOL.16,No.1,2015,1-15

3)宮武恵子,ファッションと着物-産学連携の取り組みを通して-,2020年度服飾心理学部会春季セミナー,2021年2月

27日

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 田中 淑江、高橋 由子、宮武 恵子	4. 巻 3
2. 論文標題 着物教育の可能性について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 服飾学研究	6. 最初と最後の頁 29～40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32179/fukubun.3.1_29	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田中淑江 高橋由子	4. 巻 第68号
2. 論文標題 着物の着装に関する新たな概念について-女子大生を対象とした調査より-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	6. 最初と最後の頁 31-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮武恵子 加藤裕子	4. 巻 第68号
2. 論文標題 現代におけるkimonoスタイルの基礎研究-ファッションイメージ用語を用いて-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中淑江 高橋由子 宮武恵子
2. 発表標題 女子大生の着物に対する意識と消費者行動について
3. 学会等名 日本家政学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中淑江 高橋由子 宮武恵子
2. 発表標題 被服教育における伝統的着物とファッション着物の取り組みの可能性-教育効果について-
3. 学会等名 服飾文化学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮武恵子
2. 発表標題 ファッションと着物-産学連携の取り組みを通して-
3. 学会等名 日本家政学会 服飾心理学部会春季セミナー
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	宮武 恵子 (MIYATAKE KEIKO) (40390124)	共立女子大学・家政学部・教授 (32608)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	高橋 由子 (TAKAHASHI YUKO)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------